

白金葎

11 月号



平成 30 年 11 月発行

第 92 号

定例会句会（毎月第三金曜日 アビスタ会議室）

十二月二十一日（金）第四正午～三時…白鳥、枯芦

一月十八日（金）第五正午～三時…新年一般

二月十六日（金）第五正午～三時…吹越、野焼

兼題参考句十二月二十一日分（白鳥、枯芦）

白鳥が首を埋めて白き塊

山口誓子

白鳥の千羽乗りたる池の面

佐藤喜孝

頸振る白鳥に畏怖ダリ嫌ひ

佐藤鬼房

枯芦を金色の日がつつむなり

柴田白葉女

古利根や枯蘆に日の留まれる

中村千代子

十一月例会句会報

（'18／11／16 9名欠3）

光成高志

東の明けの明星翁の忌

芭蕉忌に霧のとばりの筑波山

死んだ人夢によく出る三島の忌

道過る身を伸すあれば鼬なり

錦木の紅葉に夕日射してゐる

増田陽一

滑り来て吾を突つけよ啄木鳥けらつつき

火の色の残像芦間の鼬かな

時雨忌の羽根破れたる鴉ゐて

短日や鳥宿る木の騒がしき

水は涸れ鯨逆立つ上野なり

佐藤宏之助

芭蕉忌へ水陸両用バスに乗り

貝塚の窪は落葉の吹き溜り

縄文の蛤の冷へ手に触れて

一穂を添へて新米届きたり

防空壕跡に鼬が棲みつけり

光 みち

枯木なるいちぢくに見る天牛かみきりを

鼬の眼走る闇夜の沼辺かな

農道の轢死の鼬吹かれをり

芭蕉忌のポストに何か届く音

洞長の馳轢かれて丸くなる

浅野正美

清澄橋船から眺め芭蕉の忌

武者昭七

日短か病院後に急ぎ足

つづらな目秘めたる鬨志馳かな

杜鵑草ほととぎす 仲間増やして賑はえり

病院で大人のぬり絵冬隣

ウキウキと一步踏み出す芭蕉忌に

仲本興正

店仕舞の貼り紙多い町の辻
評判ばかりまことは知らぬいたちの屁

磯目健二

若さとは雲を追うこと桃青忌

芭蕉忌の川へ降りゆく村の道

時雨忌や百観音をめぐる笠

いたち出てにはとり小屋の騒がしき

馳走る追いつめるなよ叩くなよ

田宮敦子

釣り座ある川岸過ぎる馳かな
時雨忌や川上遠くスカイツリー

飯田孝三

金柑のひと枝活けるレストラン

築地市場跡は静かに秋日差す

芭蕉忌や蕪村について読んでをり

塩害の椰子の葉揺れて小鳥来る

訃報二通同歳おないじしなり栗を剥く

相引きの出会ひ頭を畦の馳

芭蕉忌の日溜り足の爪を切る

しぐれ忌の駅中撰ぶ握飯

入墨^{タツトウ}は医とも技とも桃青忌

中川素子

窓の陽や鼬^{うし}ごっこにはしやぐ子等

軸かへる心の一文字芭蕉の忌

鎌鼬の痛む古傷小夜時雨

立冬の亀重なれる辨天島

礼拝堂に残る菊の香木曜日

吉羽多美子

県道に鼬の死骸そのままに

芭蕉忌や親しき友は俳句の師

立冬の暖^{ぬく}さのなかの庭仕事

夕暮れの橋の上より秋の富士

立冬やささらさらさと朝の粥

一句鑑賞

芭蕉忌や奥の細道たどりたし

光成高志
昭七

芭蕉忌には誰もがこう思う思いを持つと思います。そういう気持ち、ほんとは願望を素直に書かれたのが最高点の所以です。私は先の閑話休題に書いた手前もう

一度奥の細道を朗読しながら、たどった足跡を思い出してみたらほとんど有名な場所には行ったことがあることに気づきました。それでも掲句の気持は今もあります。火の色の残像声間の鼬かな

陽一

鼬は素早い動きで出没するので凝視する暇はありません。芦間をよぎった、あれは鼬であつたと火の色の残像として鼬を云い止められたのです。尾も胴も長いのでその長さが眼底に残像として焼き付けられやすいのを色に親しまれておられる陽一さんならではの観察眼です。そう思います。因みに鳥博物館に芦間の鼬の剥製が居ます。軸かへる心の一文字芭蕉の忌

素子

芭蕉忌になつたので「心」一文字の掛軸に変えたのです。この心ばえを想像してみるに、芭蕉の接触した仏頂禅師や明の渡来僧の心越師の影響を受けた芭蕉の禅思想の心ではなからうか。そんなに難しく考えなくても軸を掛け替えてたまたま芭蕉忌であつたと気づいたのかもしれない。それをきっかけにして芭蕉を思ったのだ。

芭蕉忌へ水陸両用バスに乗り

宏之助

大阪御堂筋の南御堂での芭蕉忌はその前が芭蕉終焉の地である因縁から毎年挙行され、誓子先生は選者を務められました。こちらの東京では深川の芭蕉記念館で同様に芭蕉忌が行われています。その芭蕉忌に先に見た中川

のスカイダックという水陸両用バスに乗り、小名木川から大川を上りやって来ました。現代文明の恩恵を受けてどうも芭蕉さん恵しからずということです。

一句鑑賞

磯目健一

芭蕉忌や奥の細道たどりたし

昭七

祖師芭蕉を敬慕する人は、みな「奥の細道」の聖地巡礼の願望を胸に秘めている。その見果てぬ夢を素直に吐露、技巧を弄さない「雕琢して朴に復る」ような平明な表現の作句で共感を呼んでいる。

鼬の眼走る闇夜の沼辺かな

みち

鼬といえば俊敏で悪辣な害獣という印象で、「鼬の横切り」、「鼬の道」など俗信でも忌まれる存在だ。いかにも化け物が出そうな闇夜を沼沿いに行くと、前方に人魂ならぬ鼬と思われる光る眼が過ぎつたのである。

鎌鼬痛む古傷小夜時雨

素子

鎌鼬は諸説あるが、空気中の真空現象？などで負う一種怪奇な裂傷をいう。冷たい通り雨が降る冬の夜、その切り傷が痛み出すのである。鎌鼬も小夜時雨も冬の季語で重なるが、相まって時雨忌のある旧暦十月頃の怪しい山家暮らしを連想させ独特の俳趣を醸している。

農道の轢死の鼬吹かれをり

みち

都会化で鼬の生態を眼にすることがほとんどないが、稀に轢死体を見る。棲息する田野と機械文明の交差する農道であえなく非業の死を遂げた鼬。その哀れな死骸の上を悲風が吹き抜けるのを作者は見たのである。

つぶらな目秘めたる闘志鼬かな

正美

鶏小屋を襲うなど小さいくせに獰猛な鼬は嫌われ者だが、実は丸くて可愛い瞳の持ち主。秋に臨めば君子豹変して悪魔になる。生きたがための旺盛な活力を蓄えた小動物の二面相的プロフィールを髣髴させて妙。

防空壕跡に鼬が棲みつけり

宏之助

今、鼬が棲んでいる穴が、かつて防空壕だったと知る者は自分くらいかと、戦後七十余年、遠い戦争の記憶を想起してしみじみ思うのであった。

胴長の鼬轢かれて丸くなる

みち

敏捷に山野を横行していた鼬が車に轢かれて、無念の横死を遂げた。生前の胴長の体躯を縮めるように丸め横たわっている小動物を目にして、哀れんでいるのである。

一句鑑賞

増田陽一

訃報二通同齡おなじなり栗を剥く

孝三

知人の訃報が舞い込むようになったその訃報の主の年

齡が二通とも同じであった、更に受け取った作者自身の年齢と同じで、三人とも、とも読めるのである。互いに生きて来た年月を想い、栗を剥きながらも肌寒が身に沁みる昨今である。

貝塚の窪は落葉の吹き溜り

宏之助

大森貝塚での囁目だそうである。縄文期の遺跡で日本の考古学発祥地となったところ。「遺跡庭園」に発見者 E.S. モース博士の像もある。「貝塚の窪」の語が発掘の現場を連想させ、古代から今日まで延々と落葉が降り積もっては消えて行ったであろう時間を想像させるのである。

芭蕉忌に霧のとばりの筑波山

高志

芭蕉忌になんで筑波山か、と少し考えた。そして筑波はヤマトタケルが東征のときに「新墾、筑波を過ぎて幾夜か寝つる」と唱えた場所である。それが俳諧(連歌?)のはじまりと言う謂れはなかったか?とすると始祖と俳聖が長い歴史を隔てて呼応している、文芸の壮大な歴史が背後にある。始祖の山は遠く霧の彼方に鎖されてあるのだ・・・と読むのは如何でしょうか。

胴長の鼬轢かれて丸くなる

みち

兼題の鼬の句にはみな苦心の跡が伺えた。なかなか目撃できるものではない故、「鼬」のイメージに依りがちである。(それがいけない訳では決していないけれど) なかで

この句は偶々出合った現場での、胴長が丸くなった、という、カワイソウなどという以前の視覚的印象で出来ていてリアルな予期しない可笑しめで成功している。一寸大げさに言わせて貰うなら、戦後、「生活綴り方」の時代に称揚された「無垢な少女の目」に近いもの。

平野ひろし先生追悼文

光成高志

お便り広場の小泉博さんの文面のように本誌と交流を重ねていました彩主宰のひろし先生が急逝なされました。彩の人達も詳しいことは不明とのこと、宏之助さんには夫人から喪中の挨拶状を受けたと聞きまして哀悼の意を表さずにはおられません。ここにひろし先生のことを思い出して簡略ながら追悼文を書きます。誓子先生の天狼の元同人であられて誓子逝去後すぐに誓子俳句を継承すべく「彩」を創刊され、今年で二十五年、そのお祝いの大会をもたれた様子が今年の春に野球帽を被った丸顔のお姿で集合写真に見られます。昔、天狼八重洲句会は誓子先生の東京に合わせて月一に八重洲ブックセンター向かいの国労会館で行われていましたがそこにはひろし先生はお出でにならなかった。後で聞いたところ東京を離れて仕事が忙しかったので出られなかったと。その句会には静岡・栃木・神奈川・東京からの作家が集まってお

り、三重からの岡田啓さんと同席したこともあり、その気になればお出でになることもできたのではないかと思つたことがあります。天狼同人欄は平畑静塔、佐藤鬼房、三橋敏雄、辻田克己、中村抜刀子など有名な俳人の名がずらりとあり、私は初学の頃であつたので畏怖の念がありました。今にして思うと私は天狼に導かれるようにその句会に出席したのである。朝日の選者のうち「おとうさんは誓子が合いますよ」といつてくれたのは当時の敏子、今のみちさんであつたし、筑波から本社の八重洲勤務になり、昼休みの丸善と八重洲ブックセンターは立読みの楽しみな場所でありました。偶然誓子先生の東京句会が目の前でビルで夜行われていることを知り出席したのであつた。ひろし先生に会つたのはそこで知り合つた駿河岳水さんの記念句会後の懇親会の時、平成十二年秋であつた。私の句会では女性が多いのにここでは男性が多い、うらやましい云々という挨拶を覚えていた。後で思いがけぬ所でお目に掛かり嬉しく存じましたという文面とともに「常念」が送られて来た。これをきつかけにして「彩」が送られてくるようになった。その時はワープロでの手作りの冊子であつた。後に袋綴じのあれはワードの文字であつたと思つし、だんだん主宰誌が良くなつて行つて、五年毎の記念合同句集をいただいた。句集

も時を置いて出版された。私が平成二十一年の「塩見」を鑑賞したのは彩に掲載された。このときはUSBで投稿した。付合いが深くなつて来たのでいつか吟行でもとの思いが募り、私から提案して先生のお住まいの富士市を訪ねたのが平成二十二年夏、二泊三日の吟行句会を全部段取りされて車で私とみちを案内された。宏之助さん、熊谷の三郎さん、用平さんが参加された楽しい三日間であつた。翌年に白金霞を創刊したので俳誌交換をお願いし現在まで続いている。平成二十八年夏には白金霞五周年記念句会に選者をお願いし銀座までお出ましをいただいた。このとき、云いおおせて何かある、を現代的に解釈されて、何かは詩のことだよとおっしゃつたので、私がそれは間違いと本誌にその解釈を載せたらすぐ私が間違つていましたというはがきをいただいた。私はこの素早さと率直さに感動したのをよく覚えていた。よくお聞きしたのは、関西の人達に何かを送つてもうんともすんとも言わないなしのつぶてには参つたと。私もこれは同感であつた。ひろし先生は現代の文明の利器を毛嫌いせず、にうまく利用され、人とのつきあいでは必ず応答される、それも素早いのです。これを私は見習っています。赤沢宿のお返しをしなければならぬと心に留めていたのにそれも果たせぬままお別れすることになりました。生も一

時のくらゐなり、死も一時のくらゐなり、たとへば冬と春とのごとし。冬の春となるとおもはず、春の夏となるといはぬなり、法輪のさだまれる仏転なり、これが不生不滅、と道元禪師は書いておられますが、この悟りにはもうちよいと時間をくださいなと念願しています。(ひろし先生の俳句には触れられなかった。これは次号以後に回します。)

受贈誌(平成30年11月号)

指の先孕み蠟螂怒りんぼ(彩143号)

平野ひろし

秋の蝶豹紋柄は勝負柄

(〃)

〃

唸れるは深夜のすだま白風圈

(〃)

〃

峡中に複式授業小鳥来る

(〃)

〃

東京クラブ(11月号)

星月夜一筋白き川明り

文男

雲透かす月明ほのと峡の里

〃

起き抜けの水を湯に変ふそぞろ寒

璃子

今朝の冬鼻の先より目覚めけり

文男

(あすか十一月号) 蠟螂の風切る音や軒近し

山尾かづひろ

山尾かづひろ吟行ノート11月(四万温泉)

葱の名の駅へと電車冬来る

光みち

蒟蒻掘り早上州の空ろ風

光成高志

芭蕉のかるみ以後(48)

光成高志

芭蕉は道元の正法眼蔵を読んでいるに違いないと思うようになった。私は四〇才になる前から腰痛やら内臓やらの病気で闘病をずっと続けて来たので、その合間々々に過去を振り返ることを臥床のベッド上で行つて来た。その時何を思ったか記憶にないのだが、正法眼蔵解説1と2(岡田利次郎)、正法眼蔵禪のみちすじ上(西嶋和志、禅のすすめ道元のことば(角田康隆)、道元いまを生きる極意(栗田勇)、生きて死ぬ智慧(柳澤桂子)、芭蕉の文学(佐藤圓)を読んでいた。そして一番新しい芭蕉上(栗田勇)にめぐりあった。高一の時に読んだ出家とその弟子(倉田巨三)、親鸞(吉川英治)も記憶に残っている。今回、岡田利次郎著の正法眼蔵解説をあらためて読んでいるが、なあんだこれは芭蕉の俳論のようなものだと思った。摩訶般若波羅蜜多心経の前半を道元が噛み砕いて説いている正法眼蔵摩訶般若波羅蜜がある。これも若い時はちんぷんかんぷんだったが、今は少しわかる。

観自在菩薩の行深般若波羅蜜多時は、渾身の照見五蘊皆空なり。五蘊は色受想行識なり。五枚の般若なり。照見これ般若なり。この宗旨の開演現成するにいはく、色即是空なり、空即是色なり、色是色なり、空即空なり。百艸なり。万象なり。般若波羅蜜十二枚、これ十二入なり。また十八枚の般若あり、眼耳鼻舌身意色声香味触法、

および眼耳鼻舌身意識等なり。また四枚の般若あり、苦集滅道なり。また六枚の般若あり、布施、淨戒、安忍、精進、靜慮、般若なり。また一枚の般若波羅蜜而今現成せり、阿耨多羅三藐三菩提なり。また般若波羅蜜三枚あり、過去現在未來なり。また般若六枚あり、地水火風識なり。また四枚の般若、よのつねにおこなはる行住坐臥なり。

ここまでが第一節である。般若心經本文の道元禪師による提唱であり、岡田利次郎氏は、まことに雄渾な筆致で、一氣に書き下されています、とされ、正法眼蔵の中に数々の名文があるがこの箇所などは氏の最も魅せられる所だと述べておられる。ここの文章を一々解説するのはそういう図書が一杯あるのでそちらを読んで貰えばいいと思います。般若心經一卷も膨大な般若心經六百巻も「空」の一字を説いていると言われているから、又芭蕉の古池やの句を代表として文芸の上で「空」の世界を創造したのが芭蕉であると栗田氏の云わんとするところであるらしいので、空と何ぞやをここで書いておきます。空とは梵語のシューニャターに当てた字であつて翻譯語である。梵語のシューニャターは、存在するものにはそれ自体、実体、我などという固まりなどというものはないという意味を表す。この実体のない「我」のないこと

を体験することが重大な意義がある。頭を通して解釈した世界では、こちら側に観念的自我が立ち、向う側に我ならざるものが立つ。どちらも観念の産物であつて生きていません。動いていません。いわば固まりなのです。固まりだから実体があり、「我」があると認めやすい。とらわれやすい。「我」にとらわれた瞬間に生きているありのままの自分の持つ本来の主体性と自由性が失われます。人類の今もつている哲学科学倫理学などもこの概念を組み立てて成立したものですから、もしこれを筋書き通りに形式的に推し進めたら人類を不幸に導くことは間違いないありません。発達した脳髓のはたらきを過信した人類の悲劇です、と書いてあります。釈迦は、尊称して釈尊はこの人類の悩みを自らの悩みとし、徹底的に妥協を排して、物の究極まで突き進みました。そしてまず、頭を通してできる概念をこねくりまわして思惟することの有限性に気づかれ、さらにその奥にある「行」ーサンスカーラのはたらきにより即ち坐禅によつて一路内観にむかわれたのです。この内観の内は外に対する内ではなく、自分が自分そのものに向われたのです。観も一心に観る自分と観られるじぶんととの境がなくなつてしまつて観るのです。つまり「見ようとして見る、聞こうとして聞く、考えようとして考える」立場つまり自我からすり抜けて、

「見ようとしなくて見る、聞こうとしなくて聞く、考えようとしなくてわかる」つまり無我「見れば見つばなし、聞けば聞きつばなし、考えれば考えつばなし」つまり三昧、すなわち生きているありのままの自分に生きられたのです。そこで、自他の対立が完全に外されて、主客未分の事実「生きているありのままの自分」を直覚されたのです。自らの般若の智慧―悟りのはたらき、主客未分に生きる時の生命の自然作用―により「自ら」を生きたまま把握されたのです。この過程は釈尊成道の時の七日間の釈尊の生命が自然にたどった道で、前人未到の道をゆく釈尊のご苦心は想像に絶するものがあります。そして、ここに釈尊が最後にぶつかった当体、それしかないもの、生き通しに生きているもの、これが「空」であります、とある。「空の当体」はどんな概念もかぶせても表せるものではありません。岡田利次郎氏はこれを「生きているありのままの自分」と表現されておられる。釈尊が今から二千五百年前菩提樹下に端座して明けの明星をご覧になった刹那、「自分が明けの明星となって輝いている」という事実を徹見し、「生きているありのままの自分」を手に入れたのが仏法の起源です。釈尊をとりまく生きとし生けるものが、釈尊とまったく同じく生きている事実に気づかれたのです。生きとし生けるものはこれ

に気づかずに、ありもしない「自我」を認めてそれを中心に生活しているから、不平不満に明け暮れているのです。この「生きているありのままの自分」を発見して絶対満足の生活が送れるようにさせたいという仏の大慈悲心からほとばしり出たのが仏法であり、「生きているありのままの自分」を自覚して、その喜びの領きが今日まで二千五百年続いているのが、「生きた仏道」なのであり、又の名を「正法眼蔵」というのである。それ自体とこれを体得するにはどうしたらよいかという心得が「正法眼蔵」九十五巻のうちの冒頭におかれた「現成考案」の巻であります。生きているありのままの自分は原子からできてくるのだから、宇宙のあらゆるものを原子レベルで見れば、あなたもわたしもありません。けれどもそれはそこに存在する、物も原子の濃淡でしかないからそれにとらわれることもありません。一元的な世界、これこそが真理で、私たちが自己と他者、自分と対象物という二元的な考え方に馴れてしまつてわたしたちが錯覚をおこなっているのです。この宇宙の真実に目覚めた人のお釈迦様であるのです、という表現をされる方もおられる。本来の自分は青空のようなものであるともいう人もいます。現代は科学的に解明できた恩恵があるからこれに照らして考えても釈尊がいかに真実を見通していたか驚くべき

ことである。

お便り広場（到着順、敬称略）

光成様 この度もお世話になりました。ありがとうございます。当社の「喜怒哀楽」のことも国上寺の俳句大会及び駄句までも載せていただき重ねて感謝致します。みちさんと俳句の日々すばらしい毎日ですね。寒くなります。ご自愛くださいませ。

木戸敦子（10.30）

前略日頃、俳句結社「彩」と交流いただきましてありがとうございます。扱、この度緊急に計報のお知らせをさせていただくになりました。実は、「彩」結社主宰の平野ひろし先生が突然逝去され、家族から十月二十一日に家族葬を済ませたという連絡を受けました。私達もあまりに突然のことでした。驚くばかりでした。それに伴い「彩」の今後につきましては、会員で検討しているところです。つきましては、俳誌等の相互交流もできない状況ですので、どうぞよろしくお願いいたします。今まで長きにわたるご厚情に感謝申し上げますと共にこれからの貴結社のご発展を心よりお祈りいたします。まずは取り急ぎ連絡申し上げます。草々

「彩」俳句会代表

小泉 博（11.3）

前略 白金霞 10 月号拝受いたしました。その節みち様などにもご迷惑をおかけしました。申し訳ありません。秋

口から疲労感が抜けおらず氣力横溢というわけにはいかないのが我ながら残念です。十一月の句会も遠慮しますので投句五句を同封しました。よろしく願います。元氣回復につとめています。たがいに頑張りましょう。

（11.4 昭七）

喪中欠礼のごあいさつ謹んで拝読いたしました。故お義母様のご冥福をお祈り申し上げますと共にご家族皆々様のご健勝をお祈念いたしております。年始など世の中が賑々しい時はかえってお淋しいものと存じます。格別お大切にお過ごし下さいますようお願いしております。

二〇一八年十一月八日

所沢市

長屋璃子

お淋しい年末年始を迎えられると存じます。誰もが通って来た道ですがご供養と同時にお仕事に埋没で少し淋しさ悲しさに距離を置かれてはと思います。白金霞、元氣そうですね。毎月のように違う姿を見せていただきありがとうございます。私共の会報、句についていろいろ云いたくもありますが皆一緒のお遊び句会故、評は賞めることにしております。インフルエンザ猛威をふるっている由ワクチン打ってご用心を。

（11.11 璃子）

今月十六日の句会には突然夫婦づれで参上してさぞびつくりされたことでしょう。足元が不安なのでついて来てもらいました。皆様に親切にして頂いて当人もよろこ

んでいました。有難うございました。イタチは子供の頃
鶏を襲った光景をよく目にしたものです。高志さんの句
「あれは鮎なり」は力強く句全体をしめくくっています
ね。素子さんの「鎌鼬の古傷」の痛みは青春の痛みでし
よう。

(1119 昭七)

この間の句会会場「コビアン」もたまにはいいですね。
あそこはスタンドグラスなど綺麗だし。但し話し声も多
いから俳論までは一寸。僕もだんだん呆けるのか、版画
の下書きを今やっているのですがなかなか出来ず苦しん
で居ます。時間があれば鑑賞文ももっと多く書くのです
けれど、このくらいで勘弁して下さい。急に寒くなつて
きました。お二人ともお身体御大切に。(1119 陽二)

我孫子日記

10/19	例会
10/24	SOA
10/31	SOA
11/2	日展
*	11/3
*2	バードフェスティバル
11/6	
*3	北総病院
11/7	SOA
11/12	
*4	ラーベ・ペンタニック
11/13	同上
11/14	
*5	SOA - グローバル
11/16	例会

* 阿頼耶識てふ種子三島の忌

* 芭蕉忌や飛行機雲も茜して

日展や裸婦像百体武者一人

日展や顔より大きな足の婆

(みち)

❧ 尾の長き鼬の過ぎり胴もそう

* 河原鶉羽を拡げて扇かな

* ムナグロの白黒斑点美しき

* 沼の丘弾け初めたる檀の実

* 点々と青坊主の野ぼつち哉

* 廃田を黄となす背高泡立草

* 塩害の枯芦原は焼かれしか

* 癌細胞見つけてうれし初時雨

* 時雨忌や木下街道煙雨中

* 芭蕉忌や吾が名の姓の菩薩也

* 芭蕉忌の夕日入り込む壁の地図

* 眼前を一瞬過ぎる鼬かな

* 身を長うして芦原へ隠る鼬かな

* 農道を不意に過ぎつた鼬かな

* 道過ぎる身を伸す魍魎は鼬なる

小春日や病院ロビーに時計鳴る

(みち)

編集後記

昭七さん正子夫人同伴にてお出でになり選句選評を賜
りました。これからも同様にお願ひできれば幸いです。

白金霞十一月号(通巻第九号)平成三十年十一月二十二日発行

編集・発行人 光成高志 発行所 一七〇・一二九 我孫子市南新木二四・七
表紙の題字…加納綾女 同写真は平成三〇年二月二十一日の白金霞